

## 2007年度卒業研究

学籍番号	氏名	卒業論文タイトル
10414018	白井 絵理奈	「感じる力」と「考える力」を育む環境教育
10414029	柿崎 晃佑	地球温暖化の対策 - 温暖化再生可能エネルギー・環境税を通じて -
10414034	鎌江 真己子	「いのち」の環境教育
10414036	唐津 周平	「学習意欲を生み出す教育環境」
10414067	鳥居 祐介	剣道の中に見る精神性について
10414077	沼田 ともみ	現代の食環境を見直し豊かな人間性を育む - 共通感覚論による触覚の見直し -
10414094	前川 真実	今「食」を見直す - 家族とともに -
10414107	八木 朋美	「いけばな」を通じた生命観の転換

< 目次 >

はじめに

第一章 子どもの感じる力と考える力

第一節 子どもの感じる力の低下

第二節 考えない子どもたち

第三節 感じる力と考える力の重要性

第二章 感じる力と考える力を育む教育

第一節 感じる力を育む教育—シュタイナー教育の実践—

第二節 考える力を育む教育—レッジョ・エミリア保育の実践—

第三節 考える力と考える力の根底にある感性

—レイチェル・カーソンの『センス・オブ・ワンダー』—

第三章 環境教育を通じた感性の覚醒

第一節 感じる力—センス・オブ・ワンダー—の育成

第二節 学校教育における考える力の育成

第三節 生涯学習としての環境教育

おわりに

文末脚注

参考文献

< 要約 >

私たちを取り巻く環境は、地球温暖化などの異常気象、動植物の種の減少など、少しずつしかし着実に破壊が進んでいる。環境破壊は非常に深刻である。しかし、それでも空を見上げると黄昏の美しさ、満天の星空、鳥たちのさえずりが広がっている。私たちはこのような自然の美しさや生命の息吹、ときに猛威を感じることで自然に対して畏敬の念を抱く。

人間は地球上で唯一言語を持ち、感じ、考えることができる生き物である。その人間が、他の生命と、この地球上で共存していくために果たすべき「役割」とはいったい何なのか。それは環境問題を考え、解決に向けて動き出すために重要となる、次世代を担う子どもたちを心豊かで主体的に責任ある行動ができるよう育成することではないだろうか。

しかし、現在の子どもたちは流動する社会の中で自己の存在価値を見失いがちである。子どもたちが、変化の激しい社会を人生に生きがいを感じ、自ら考え、主体的に生きていくためには、改めて人と人とのつながり、人と自然とのつながり、そして生命のつながりを見つめなおすことが必要であると考えられる。

そこで、子どもたちが教育的影響を強く受ける学校教育で改革が必要ではないだろうか。総合的学習の時間における環境教育に着目し、現代の子供たちに不足している「感じる力」と「考える力」の基盤となる「センス・オブ・ワンダー」の重要性について考えたい。

春になると固い蕾が開くように、環境教育によって子どもたち本来のみずみずしい感性がよびさまされることを願い、論じていきたい。

< 目次 >

はじめに

第一章 温暖化とそれぞれの格差

- 第一節 地球温暖化の問題
  - 第二節 生物種間の格差と地球温暖化
  - 第三節 世代間の格差と地球温暖化
  - 第四節 地域間の格差と地球温暖化
- 図表

第二章 地域の特性を生かしたエネルギー利用

- 第一節 エネルギー需要の地域特性
  - 第二節 太陽光発電に関する地域特性
  - 第三節 風力発電に関する地域特性
  - 第四節 バイオマスエネルギーに関する地域特性
- 図表

第三章 環境税と排出権

- 第一節 環境税
- 第二節 排出権
- 第三節 環境税と排出権の導入

おわりに

文末脚注

参考文献

< 要約 >

まず、私は地球規模で、問題視されている「地球温暖化の問題」に着目した。その中で、特に化石燃料の使用によって、二酸化炭素が排出されているのが大きな原因でもある。そこで、私は21世紀において最も活用されなければならないであろう再生可能エネルギーを中心として論文を書きすすめた。更に、昨今日本でも導入が検討されている、「環境税」や「排出権」についても触れている。

第1章では、地球温暖化問題で生ずる不公平な格差を生物種間、世代間、地域間の3つに分けて考えてきた。第2章では、地域の特性について、4つのポイントから分析してきたが、それぞれに地域の特性が認められた。さらに第3章では、「環境税」と「排出権」を中心に論文を進めている。「環境税」や「排出権」はEU・北欧諸国では、すでに導入されている。このことを例に出し考察することで、日本にはどのような税政策がとれるのであろうか、という展望を、まとめている。

最後に3章通じて、表やグラフなどのデータを使い、見やすくわかりやすいように、まとめてみることを目標としていたこの論文で、副佐の先生から「読みやすかった」と言われ、少しは目標を達成できたと思った。

<目次>

はじめに

第一章 現在の教育上の問題

- 第一節 子どもの能力の低下
- 第二節 体験できる環境の変化
- 第三節 視覚の優位化の問題

第二章 環境教育の必要性

- 第一節 環境教育とは
- 第二節 学校における環境教育の位置づけ
- 第三節 教育現場における環境教育の問題

第三章 環境問題の解決に向けて

- 第一節 現在の環境問題
- 第二節 体験学習を通じた共通感覚の覚醒
- 第三節 「いのち」の環境教育

おわりに

文末脚注

参考文献

<要約>

今日、地球環境の変化は刻一刻と深刻化している。しかし、そんな地球を担う子どもたちにも、生活環境の変化が深刻化しているように感じる。

近年、子どもの遊びの内容や時間の使い方が変わってきた。毎日、日が暮れるまで外で遊んでいた子どもは、いつのまにか内での遊びに変わってきている。また、遊びだけでなく、習い事や塾などに行くなど遊ぶことすらしない子どもも増えている。遊びが減ることで、遊びの中で育まれる「問題解決能力」や「判断力」、「創造力」といった能力が低下している。

そのような子どもの現状を懸念するように、教育現場では「総合的学習の時間」が導入された。この時間を導入することによって、「問題解決能力」や「主体的思考」などの育成に励んでいる。外に出て、たくさんの人に触れ合い、学校ではできない体験をすることで感性が磨かれるのも一つの目的だろう。

さらに、最も重要なこととして生命の大切さを教えることがとても大切だと感じる。「自分は今この地球に生きている」ということを教育する必要があるのではないだろうか。「生きている」とは、つまり「死」への道をたどっている。質の高い「生き方」がその人の「死に方」なのではないだろうか。

第1章では、なぜ「遊び」が減っているのかについて述べていきたい。具体的には、体験できる場所の変化や視覚の優位化などの理由を中心に述べていく。第2章はそこから少し視野を広げ、環境教育という立場から、学校における環境教育を中心に述べていきたい。そして、第3章では、現在の環境問題について述べるとともに、「いのち」について述べていきたい。

<目次>

はじめに

第1章 現代における教育問題～学習意欲の減退を探る～

第1節 学力低下の背後にある学習意欲の減退

第2節 学習意欲の減退を導く社会

第3節 意欲をなくす子どもたち

第2章 内発的動機づけと「総合的な学習の時間」～「生きる力」を育む教育～

第1節 内発的動機づけが学習意欲を起こす

第2節 知的好奇心と「生きる力」

第3節 教科学習を促す「総合的な学習の時間」

第3章 学習意欲を生み出す教育環境～家庭・地域・社会の観点から～

第1節 家庭教育から学習意欲を育む

第2節 地域とつながる学校

第3節 学習意欲を生み出す生涯学習社会

おわりに

文末脚注

引用文献一覧

参考文献一覧

<要約>

「学力低下」という言葉が近年メディアに近年よく取り上げられているように思う。学力の低下は微々たるものだと論じる者もいれば、確実に学力は年々低下しており、危険な状況にあると論じる者もいる。そのような、どれだけ学力が下がっているのかという論議は私が問題提起するところではなく、学力低下の奥に潜む学習意欲の減退こそが私の問題提起するところである。

学習意欲とは「学習を促進させる、あるいは学習へと駆り立てる内なる力」と塩見邦夫の言葉を借りて本分では定義しておきたい。本文では、学習の主体である子どもがどういった教育環境であれば

学習意欲を高めることができるのかということを考えていく。まず第1章では、学力低下問題を取り上げ、それを取り巻く社会や家庭は現在どういった状況なのか、そこにどのような原因があるのかを解明し、子どもの学習意欲は本当に減退しているのかを明らかにする。第2章では、そもそも子どもが意欲を起こす時というのはどのような時なのかを検討し、それを実現できる教育とはどのようなものかを考える。最後に第3章では、視野を広げ、どのような学校、家庭教育、社会が学習意欲を生み出すにふさわしい教育環境となり得るか、この国の教育はこれからどうあるべきなのかを考えることをこの論文の最終目標とする。

<目次>

はじめに

第一章 剣道史に見る精神性の変遷

第一節 江戸時代以前の剣術

第二節 江戸時代における剣道の発展

第三節 明治から現代に至るまで

第二章 現代剣道に見る精神性

第一節 現代剣道の競技性

第二節 形稽古に見る精神性

第三節 剣道の作法に見る禅の精神性

第三章 様々な関わりの中における剣道

第一節 剣道の持つ教育的意義

第二節 芸道との関わり

第三節 武道の国際化に伴う問題

終わりに

文末脚注

参考文献

<要約>

武道は日本の枠を超えて、世界中にその競技者を増やし続けている。柔道はオリンピック種目として世界中の人に認知された競技となった。剣道でも、世界大会を開催するなど、普及活動が積極的に行われている。しかし、武道が世界に進出していくにつれて、武道の持つ精神性が希薄になってきたように感じる。試合に勝利するための技術ばかりが横行している。それは端的にいうと、「武術」への退化化であると私は考える。武道は武術とは異なる。

武道が最終的な目的とするところは、勝利至上主義に基づいて相手を倒すことではなく、日常における身体の鍛錬が精神の鍛錬につながり、競技者の高い人格形成に関わる点にあると考える。武道の中から剣道を取り出して考察し、剣道が持つ「精神性」とはどのようなものなのか。

第1章では歴史の変遷の中で剣道の精神性はどのように変化してきたのかを述べる。第2章では剣道の競技性について考察した上で現代における精神性を述べる。第3章では、さまざまな文化との関わりを考察した上で、剣道が競技者にどのような精神的作用を与えるかということを考える。

現代の食環境を見直し豊かな人間性を育む  
- 共通感覚論による触覚の見直し -

10414077 沼田 ともみ

< 目次 >

はじめに

第一章 子どもたちをとりまく食環境の乱れ

- 第一節 孤食による深刻な影響
- 第二節 食品添加物による人工的なうまみ
- 第三節 食事観と食の好みの形成

第二章 食事を通じて心を豊かに

- 第一節 五感の組み換えと触覚の見直し
- 第二節 身体から精神へのアプローチ
- 第三節 心を豊かにする食事とは

第三章 環境教育への応用

- 第一節 環境教育を通じて生きる力を育む
- 第二節 より五感で自然を感じるために
- 第三節 環境教育の場の食の体験

おわりに

文末脚注

参考文献

< 要約 >

近年、外食や加工食品を摂取する機会が増え、人々の食事が単調になっているように思う。本論文では、単調な食事によって味覚ばかりでなく五感の他の感覚も鈍ってしまうのではないかとこのことを問題としている。そこに、中村雄二郎の共通感覚論を用いて、五感を組み換えること、また食事のなかでの触覚が担う役割を見直すことで、食事によって心を豊かにすることを試みている。食べるという営みが身体だけでなく豊かな心を作るという視点に立ち、食の問題点を整理し、心を豊かにする食事というものを提案してゆく。

第一章では、子どもがひとりで食事をとることによって現れる心身への悪影響の例を挙げ、また、食品添加物によるうまみや幼少時の食事内容などがどのように食事観の形成に影響するかなどを考察し、それらが心の健康にも影響を及ぼす可能性があることを示した。それらの結果をふまえて、第二章では、共通感覚論を手がかりに、「食」を見直すことで再び情緒を豊かに発達させることを考察している。第三章では、第一章と第二章をふまえて、五感を通じた学びの場としての環境教育について焦点を当て、環境教育を通じて生きる力を育むことを考えている。

< 目次 >

はじめに

第一章 現在の食環境

- 第一節 現代の食生活 - 「こ食」から始まる食生活の乱れ -
- 第二節 失われる日本の食文化 - 食の作法を知らない子どもたち -
- 第三節 家族形態の変化と現代の食 - 家族の個人化による食の外部化 -

第二章 人と食そして家族

- 第一節 人にとって「食べる」とは - 共食から生まれた人の食 -
- 第二節 共食がもたらすもの - 共食からの人間形成 -
- 第三節 かつての家族と食 - 共食が可能だった時代 -

第三章 食への思いを取り戻すために

- 第一節 大人達への食育 - 親自身の意識改革 -
- 第二節 家族関係の見なおし - 共食を行うために -
- 第三節 現代の家庭の中での食育 - 共食による食の経験 -

おわりに

文末脚注

参考文献

< 要約 >

現在、食の問題は社会にあふれ、現代人は食についてとても敏感になっている。多種多様な食品に溢れ、高価なものから安価なものまで手軽に手に入れられるという現実の陰では、毎日大量に残飯が廃棄されるという現実がある。そのような現実のなかで年々失われてゆく伝統的な行事食に目を向けることもない。現代人は食べ物に対する特別な思いを知らない。その思いとは食べることに対する感謝の気持ちやそこから生まれる、生きる喜びである。ではなぜ現代人はそういった思いをしらないのだろうか。

現代社会は簡単に食品が手に入る世の中である。食べたい時にスーパーやコンビニに行けばすぐに食べ物が手に入る。今や「つくるもの」であった食べ物は「買うもの」に変わったのである。そして人の食生活の基盤である家庭の中の食事その流れにのまれている。

人の食の原点は家族である。だが、年を重ねるにつれ、次第に家族と一緒に食事をしなくなり、一人で食事をする人が増えている。食文化を教えてくれる人も、礼儀正しい食べ方を注意してくれる人もそこにはない。その食卓はただの「栄養補給の場」になっている。しかし、食はただの栄養の塊ではない。なぜこんなことが起きるのか。それは食の原点にある家族関係が多様に変化してきているからである。

本論文では、第一章では現代人の食生活の乱れとその原因である「こ食」と、家族の多様化について、第二章では人の食の原点が人と共に食べる「共食」であったことから「共食」が人にどのようなものをもたらすのかということ、そして「共食」が行うことができた家族関係について論じる。第三章では現代の家族で「共食」を行うために家族関係の見なおし、そして大人のための食育、「共食」の場ではどのようなことを行えばいいのかについて論じる。



< 目次 >

はじめに

第一章 植物と日本人との関わり

第一節 花と日本人

第二節 樹木と日本人

第三節 日本の植物の現在

第二章 「いけばな」の成立

第一節 「いけばな」成立の背景

第二節 「いけばな」の成立の過程

第三節 「いけばな」の発展

第三章 花のいのち

第一節 花を育てる

第二節 花のいのちを切り取る

第三節 花を愛でる

おわりに

文末脚注

参考文献

< 要約 >

我々日本人は、古くから花と共に生活をしてきた。喜びのときも悲しみのときも、花は人々のそばにあった。おそらく、花を嫌いだという人はいないだろう。

花は、我々日本人の生活を助け、四季折々の花の変化は鑑賞用としても人々の目を楽しませてきた。そして、室町時代に成立したとされる「いけばな」を学ぶことは、貴族の心得となっていた。その後、いけばなは庶民にも普及し、日本の伝統文化となった。現在でも、多くの人々がいけばなに携わり、花の美しさの表現を追求している。また、花見や紅葉狩りというような、季節の移ろいを感じ、その時々を楽しむイベントが現代でも人々に親しまれている。

我々がいけばなをすることは、花にとっては「生」を切り取られるということである。花は植物であるから、動物のように危機に対して抵抗できない。我々は、あまりにも簡単に花のいのちを切り取ってしまっていないだろうか。いけばなの成立時より育まれてきた「いけばなの精神」を現代でも汲みとっているであろうか。

第一章では、花と日本人が古くからどのように関わってきたかを述べ、現状との比較を述べる。第二章では、いけばなという手法を通して育まれる精神性について述べる。第三章では、花を切り取って生ける、ということがどのような意味を持つのか、花のいのちについて考えていく。